

人生を変えた5日間

—S氏夫妻に捧ぐ—

松下 達彦

真夏の空港は独特の蒸し暑さと埃っぽさに包まれていた。初めて降り立った外国、上海で僕は一人きりだった。大学に入ってから1年あまり中国語を勉強したものの、そのレベルは英語でいえば日本の中学校2年程度だろう。コミュニケーションは身振りと五感、そして辞書だけが頼りだった。

税関を抜け、さて街に出ようと思ったところで、中国の通貨を一銭も持っていないことに気づいた。はて外貨兌換ができるのはどこだろう。インフォメーション・カウンターがあったが、尋ね方がわからない。辞書を引いて「兌換処はどこですか。」と作文して書き付け、それを読み上げながらカウンターの女性に見せた。彼女は僕が通ってきたばかりの税関の向こう側を指さしながら何やら早口でまくし立てた。さっぱりわからなかったが、どうやら通関の前に兌換しなければならなかったらしい。

さて、どうしたものか。街へ出るには中国通貨が必要だが、それが無いのだ。税関を後戻りするわけにもいかない。しばらくベンチに座り込んで途方に暮れていた僕にタクシーの客引きらしき男が何人か声をかけてきた。「Bu yao (不要)」と言って追い払う。そうだ！ 再び辞書を引き、作文して客引きに言ってみた。「和平飯店までいくらですか。」「15.4元。」聞いていた相場の通りだ。続いて作文のメモを見せながらそれを読み上げる。「人民元を持っていないから和平飯店で兌換してから払うということでもいいですか。」男はメモをまじまじと眺めてから「いいよ。」と一言。無事、商談が成立し、車に乗り込む。込み合った道をのろのろと30分ほど走って和平飯店の裏手に着いた。運転手はホテル内の中国銀行のカウンターまで連れていってくれ、そこで無事に支払いを済ませた。

その日の晩の北京行き特急の二等寝台の切符を手に入れ、上海の黄昏の数時間を楽しんだ後、列車に乗り込んだ。今は4~6万円程度の東京-北京往復の航空券が当時は20万円ぐらいかかった。それで上海経由にしたのだが、列車の旅は思いがけず中国語練習の機会を与えてくれた。寝台の客は皆ゆったりとくつろいでいて、しかも一等の個室エグゼクティブとちがって開放的だ。僕はメモ帳とペンを両手に持ち、辞書を傍らに置いて周囲の客に話しかけられるままに会話を重ねた。竹下登、松本清張等々、中国の人々は日本のことを結構よく知っている。日本の政治や文学、家族のこと……向こうのことばがわからないときは「すみません、もう一度言ってください。」「もう少しゆっくり言ってください。」「どう書きますか。すみませんが、ここに書いてください。」「ちょっと待ってください。辞書を引きます。」などを繰り返した。翌日の午後に北京に着くまでにメモ帳はいっぱいになった。

当時、母が北京で働いていたので、北京を足場にして中国を楽しむつもりだった。運良く(?)僕が北京に着く頃に母は職場の団体旅行に行くことになっていて、僕は母の宿舎の管理人さんから鍵を預かって10日間ほど北京で一人暮らしをすることになっていた。ところが何をしでかす

かわからない息子に不安を抱いたのか、母が友人の中国人S氏夫妻に、息子を頼むと、ことづけていったらしい。北京に着いた日の午後にS氏から宿舎に電話が入った。S氏夫妻は「こんにちは」「さようなら」程度の日本語しか知らない。僕は辞書を引ながら電話で会話をした。何しろ初級程度の中国語である。顔の見える相手なら相手の反応を確かめながら話せるが、電話ではそうもいかない。それでも、相手が今からこちらを尋ねてくると言っているらしいことはわかった。僕は何とか「謝謝」よりも程度の高い敬語で感謝の意を伝えたかったので、電話口で真夏なのに冷や汗をかきながら「ちょっと待ってください、辞書を引きます。」と言い、辞書の表現をつまづきながらも読み上げて、丁寧に謝辞を述べた。何と言ったのかは覚えていない。だが、そのときに僕が使った謝辞は「まことにありがたく御座候」式の中国語だったらしい。電話口の向こうでS氏が笑いをこらえていたことを、ずっと後になって聞かされ、皆で大笑いしたものだ。

その電話の日から4日間、S氏夫妻は自転車で北京の名所旧跡をくまなく回ってくれた。僕は夫妻の後を、借りた自転車で追っかけて走った。夫妻は根っからの北京っ子で、北京に深い愛着とプライドを持っており、「これは乾隆帝（清朝最盛期の皇帝）の書いた文字だ。」「以前ここには……があった。」等々、歴史解説から裏町のエピソードに至るまで、こちらの中国語力にはお構いなしに、きれいな中国語で解説してくれた。「もう一度言ってください。」「その単語はどう書きますか。」「ここに書いてください。」「ちょっと待ってください。辞書を引きます。」「〇〇はどういう意味ですか。」「何度これを繰り返したことだろう。」「中国語に……という言い方はありますか。」「……の場合に～と言えますか。」「（正しい中国語に）なおしてください。」「もよく使った。メモにたまった語句は宿舎に戻ってから必ず辞書で確かめた。こんなふう覚えた単語は教室で覚えたものどちがって、いつまでも忘れないものだ。今でもどこで覚えたかを覚えている語句や表現が少くない。

市郊外の廬溝橋（1937年、日中戦争が始まった場所）や香山公園などもS氏夫妻とともに片道1時間ぐらい自転車をこいで行ったのだが、交差点で信号待ちの間に首からかけていたバッグから辞書を取り出して単語を調べた。そうしなければS氏夫妻と会話が続けられなかったのである。こうして北京の最初の4日間で2冊目のメモ帳もいっぱいになったが、この4日間を過ごしてからは一人で街へ出ることに全く不安を感じなくなり、どんな相手でも一応のコミュニケーションができるという自信がついた。

さて、以上の体験から、僕の使った外国語学習の「わざ」（ストラテジー）のポイントをまとめると、次のようになる。

・文法の基本を学ぶと同時に、以下のコミュニケーション・ストラテジー（わざ）に用いる表現をマスターする。すなわち、

再生要求 「もう一度言ってください。」「ゆっくりお願いします。」等

確認 言い換え「～は…ということですか。」

おうむ返し「〇〇（って何ですか）？」

字の確認「～はどう書きますか。」

時間稼ぎ 「ちょっと待ってください。（辞書を引きます）。」等

訂正求め 「この言い方でいいですか。」

「もし私の〇〇語におかしなところがあればなおしてください。」等

- ・相手の言ったことを繰り返せるだけの聴解能力と発音を初級段階でマスターする
- ・友人を作り、話さざるを得ない状況をつくる（留学や旅行中はもちろん、日本でもできる）
- ・外で覚えた語句の意味・用法を、その場で、または帰宅後に辞書等で調べて確認する。

今にしてわかることだが、状況そのものが「その土地で生活し、適応する」という学習ニーズに合致していたので、その状況で覚えた表現を何度も繰り返し使用するチャンスがあり、よく定着した。そして、その土地で暮らす楽しさや学習意欲にもつながった。それは教室での一斉教授では得がたい「学習の自律性」獲得のプロセスだったのだ。また、言い換えによる確認や、訂正求めの過程で自分なりに文構造の認知を繰り返していたこともわかる。確認や訂正求めで「文法の習得」も進んでいたのである。僕は今、このような自律的学習を教室の内外で促せるような「学習プロデューサー」になりたいと思っている。

北京でのS氏夫妻との4日間と、上海から北京までの列車の旅をあわせた計5日間に、おそらく僕は日本での半年分以上に値する外国語学習をした。僕は国語国文学を専攻していたし、今でも日本語を仕事の種にしているけれども、このときの中国語体験が後の中国留学や、今の日本語教育の仕事や、中国人のカミサンとの結婚に深くつながっていることを考えると、これは掛け値なしに人生を変えた5日間と言ってよいだろう。当時のメモ帳は今でも宝物として僕の部屋に眠っている。

(国際学部専任講師・日本語担当)



外国語に強くなるために

1999年3月18日

編集 桜美林大学外国語教育センター
発行 桜美林大学
〒194-0294 東京都町田市常盤町3758
TEL 042-797-2661(代)

印刷 有限会社ティーディーエス
TEL 0466-46-6720

(非売品)